

緑の風 FAX版

NO. 19

2017年11月15日

JR東労組情宣部

国際鉄道安全会議2017

「国際鉄道安全会議（IRSC）2017」は10月22～27日の日程で香港で開催され、労働組合の参加はJR東労組だけでしたが、会議には40カ国、300名以上が参加しました。

今年の会議は、「安全強化のための革新と協力」というテーマで、世界各国から発表が行われました。

JR東日本からは、「空気バネ圧モニタリングシステムの開発」と「JR東日本の踏切の安全対策」の2つプレゼンテーションが発表されました。

JR東労組からは「人間労働の特殊性を踏まえ、鉄道の安全性向上とヒューマンエラー未然防止を実現する」について、JR東労組本部政策担当部長・森優さんが発表しました。

ヒューマンファクターの観点から「安全とは何か？」を考えた場合、常に目の前にあるのは「危険」であり、その危険を事故にさせないために、危険を管理し、重大事故を予防していくことが、安全を確立していく上で重要だと指摘しました。そして、鉄道のみならず、公共交通機関の安全を考えるにあたっては、「墓石安全」であった安全対策から、「予防安全」とその先の「予知安全」へと高めることはもとより、近年増加する自然災害に対する「防災・減災」の観点や、「自動化」「システム化」が進展する一方で、人間労働に頼らざるを得ない鉄道事業の特性から「労働安全」の観点を加えた、将来にわたる「鉄道安全」のあり方について提言しました。

また、かんり部会事務次長・吉際正実さんは「鉄道の安全を担う人材育成のあり方について」発表しました。JR東日本に顕著に表れている急激な世代交代による社員構成の若返りや、社員数減少の中で、貴重な経験を学ぶ場の減少、メンテナンス部門では実際の機器に触れることができず、結果、一歩間違えれば大事故に繋がりがねない不安全行動が後を絶たない事態など、“技術集積型産業”である鉄道従事者の育成が大きな課題だと示し、鉄道事業は一人ひとりの力を結集したチームワークで成り立っていますが、の能力向上を重視するあまり、安全や職務の重要性を認識できない事象も多く発生している現状を指摘し、鉄道に対する帰属意識を高め、鉄道の存続と安全を担う人材育成のあり方、「競争」ではなく「切磋琢磨」する職場風土、事故に至らなかった取り扱い誤りを「成功例」として語り合うことができる職場風土、そして多くの先達が築き上げた安全風土を学び継承する人材育成を提言しました。

国際鉄道安全会議は、JR東労組とJR東日本が世界に呼びかけて、1990年に日本（東京）で始まった会議です。それ以降、鉄道の安全を担う様々な分野のエキスパートが毎年本会議に結集し、情報・知識を共有し、世界中の鉄道安全に貢献してきました。これからも全世界に安全第一の鉄道を発信していきます。

